福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

天使の罪

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂田, 登 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/8078

天使の罪

De Malo Culpae Angelorum

坂　田　　登*

或日神の子等来たりて主の前に立つ、
サタンも來りてその中にあり、
主、サタンに言たまひけるは汝何處より來りしや。
サタン、主に應へて言けるは地を行めぐり此彼經あるきて來れり。
Quadam autem die, cum venissent filii Dei ut assisterent coram Domino,
affuit inter eos etiam Satan.
Cui dixit Dominus : Unde venis?
Qui respondens, ait : Circuivi terram, et peramblavi eam.
(Iob. 1 : 6~7)

われ天にのぼり・・・
・・・至上者のごとくなるべし。
Ascendam in caelum...
...ero similis Altissimo.
(Isa. 14 :13～14)

人間はビュリダンの驢馬であり、人間の魂は相等しい二つの力にこもごも引っぱられて勝ったり負けたりするものであって、人間の生命とは、天国と地獄のあいだに交わされる不安な闘い以外の何ものでもないという、そんな信仰がある。これは二つの相反する本質、サタンとキリストを信じることにほかならないが、このような信仰は、宿命的に内心の葛藤を生ぜしめるべきものであった。・・・

*福井大学教育地域科学部社会系教育講座

・　・・作者は悪魔の誘惑に屈服し、悪魔を賛美することになってしまった。あのカトリシズムの私生児ともいうべきサディズムがあらわれるのは、かかる時である。じつに幾世期もの昔から、カトリシズムは手を変え、品を変え、悪魔祓いや焚刑の手段に訴えて、このサディズムを追及してきたのであった。

・・・

したがって、サディズムの力、およびサディズムがあらわす魅力は、ひとが神に対して捧げるべき敬信の念や祈りをサタンに引き渡すという、禁断の享楽の裡すべて存する。

ユイスマン『さかしま』第12章[1]

西洋のキリスト教文化において悪魔（サタン、satan、diabolus、daemon）即ち罪を犯した天使（堕天使）の存在は、隠れた仕方で大きな力を持ってきたといえる。ミルトンの『失楽園』やゲーテの『ファウスト』といった偉大な文学作品においてもその役割は極めて大きい。また、ユイスマンが言うとおり、悪魔祓いや魔女狩り、異端者に対する焚刑などにおいては、それを行う人々の心の中にこそ悪魔が潜んでいたといえる。そのようなサディズム的な力を思う存分に振るってきたものこそ「悪魔」である。それはまさしくカトリシズムがあるいは神が産み落とした私生児であり、我々の精神世界においてその存在は、未だ「科学的理性」を獲得していなかった人間たちの思い描いた単なる迷信のようなものではなく、極めて現実的なものなのである。ここではそのように西洋キリスト教文化の中で大きな力をふるってきた悪魔について、それがどのような現実の存在として中世の神学・哲学的思惟の中でとらえられていたのか、トマス・アクィナスの『神学大全』において論じられた悪魔の姿に即して考えてみたい。

そもそも天使（angelus）が罪を犯す（peccare）ということは可能なのであろうか。純粋な形相（forma）即ち精神として存在し、質料（materia）と結びついていない天使の内には可能態（potentia）としての性質はなく、[2]したがって欠如としての悪も存在しないのではないか。天使にとって本性的な（naturale）こととはまさしく神を愛することではないか。そのような天使が神を愛さなくなるということは不可能ではないか。[3]天使は常に真なる善のみを欲求する（appetere）。ならば、罪の原因ともなる見せかけの善を欲求して罪を犯すということも天使にはあり得ないことではないか。[4]

しかしながら、天使もまた理性的被造物（人間）と同様、その本性そのものにおいて罪を犯し

---

[1] Joris-Karl Huysmans, *À rebours,* 1884, Flammarion, Chapitre 12, pp.189~190
（澁澤龍彦訳による）

[2] ST., I, q.63, a.1, arg. 1.

[3] ST., I, q.63, a.1, arg. 3.

[4] ST., I, q.63, a.1, arg. 4.

うるのである。もしある被造物が罪を犯すことがないとしたら、それはそのものの本性に基づくことではなく、恩恵の贈り物（donum gratiae）によるのである。

ところで、罪が行為の正しさ（rectitudo actus）からの逸脱であるなら、それは自然においても、制作においても、道徳的な事柄においてもあり得るものである。そして、その正しさから逸脱することのない行為とは能動者の力（virtus agentis）がその規則（regula）となっているような行為である。例えば、熟練の大工の手が鋸で材木を切断するときの規則であるなら、それ以外のものが規則となったとき切断の正しさは失われてしまう可能性がある。しかるに、神の意志（voluntas）は神の行為の唯一の規則である。なぜならそれはより上位の目的へと秩序づけられることはないからである。それ故、神の行為がその正しさから逸脱することはあり得ない。しかし、如何なる被造物の意志も自らのうちにその正しさを有してはおらず、それは常に神の意志によって恩恵のうちに秩序づけられなければならない。それ故、如何なる被造物の意志もその本性の状態によって罪を犯す可能性があるということである。[5]

天使は質料に由来するような可能態性は有していなくとも、知性的存在者そのものとしては可能態としての性質を有しており、このことにもとづいて様々な対象に向かい、そこで自らのうちに悪を宿してしまう可能性を持つのである。[6]また天使は自由決定力（あるいは自由意志、liberum arbitrium）を有しており、それが悪の原因ともなる。[7]さらに、天使が超自然的至福（beatitudo supernaturalis）の対象としての神にその愛を向けるのも、神からの無償の愛に支えられてのことであるし、天使はまたそこから離れてしまうこともありうるのである。[8]

罪とは自由決定力のはたらきにおいて生じるものであるが、一つには選択された対象が悪である場合がある。例えば人間がそれ自体として悪であるような姦淫（adulterium）を選択して罪を犯すような場合である。このとき、姦淫の罪は無知と過ちから、情念（passio）と習慣（habitus）の影響のもと生じ、道徳性一般において要求される秩序からは外れた歓び（delectatio）を選択する。しかし、情念を持たない天使においてこのような罪は生じえないものである。それとは異なった、天使が罪を犯すような場合とは、選択の対象はそれ自体として善きものであるが選択そのものが誤っているという場合、即ち、神の意志としての道徳規則によって課される秩序から外れているという場合である。例えば、天使は自ら神のようになりたい願うことによって罪を犯してしまうのである。[9]

では、いかなる種類の罪が天使のうちには存在しうるのであろうか。そもそも罪とはある者の

---

[5] ST., I, q.63, a.1.

[6] ST., I, q.63, a.1, ad1.

[7] ST., I, q.63, a.1, ad2.

[8] ST., I, q.63, a.1. ad3.

[9] ST., I, q.63, a.1. ad4.

うちに二通りの仕方で存在しうるものである。ひとつはその罪に対する責任者、被告人（reatus）として、もう一つは自らのうちに罪を備えた状態（affectus）として。そして、第一の仕方において、天使のうちにはありとあらゆる罪が存在するといえる。なぜなら、悪魔となった天使は人間たちをあらゆる罪へと導いていくからである。しかし、第二の仕方においては、天使たちのうちにはその霊的本姓（natura spiritualis）に適合した罪しか見出されない。すなわち、肉体の情欲に由来するような貪欲や淫乱といった罪は天使のうちには見出されないのである。

しかるに、天使が霊的な善を対象としてそれに向かいながら、神によって設立された規則に従わないなら、天使にも罪が生じるのである。つまり自ら神に服従しないこと、それがすなわち、天使が犯す第一の罪、おごり（superbia）である。そしてこれに続いて生じる天使の罪がねたみ（invidia）である。ある心の状態があることを欲求すると同時に、またそれと対立するものを否定しようとすることがねたみである。すなわち、ねたみを持つ人間は他者の有する善を悲しむ。なぜなら、それは彼自身が獲得しようとする善の妨げとなると彼には思われるからである。悪しき天使にとって他者の善が自らの善の妨げとなるというのは、それによって彼が獲得しようとしている善あるいは卓越性（excellentia）の単独性（singularitas）が損なわれるからである。こうして悪しき天使は人間の行う善をねたみ、また神の卓越性をも、それが彼の意志に反して神の栄光のために用いられるがゆえに、ねたむのであり、おごりの罪の後にねたみの罪を犯すのである。[10]

それでは、いかなる欲求が天使に罪を犯させたのであろうか。それは神のごとくになりたい（appetere esse ut Deus）という欲求である。神のごとくにといっても、それは神と全く等しいものになりたいと思ったわけではない。それは天使の持つ自然本姓的な認識においても不可能なことであるとはっきりわかっており、人間のように情念や習慣によって惑わされることのない天使が神と等しくなることを欲求するはずはない。そもそも、トマス的な自然の秩序においてより下位の者がより上位の者になろうとすることは、それらの自然本姓そのものに反することである。例えば、驢馬が自然においてより上位のものである馬になりたいと願うことはあり得ない。もしそれが可能であるなら、それは驢馬が驢馬であることをやめてしまうこと、すなわち自らの本性を破壊してしまうことを意味するからである。ただ人間はしばしば想像（imaginatio）においてより上位のものとなろうとすることがあり、このとき過ちを犯す。人間は何らかの付帯的性質を獲得することによって、例えば着飾ったり、化粧をしたりしてより上位のものになろうとするが、このときその人間の主体はしばしば腐敗へと導かれるのである。しかし、天使においてはこのようなことはあり得ない。

それでは天使が神のごとくになりたいと思うのは類似（similitudo）においてである。しかしながら、いかなる被造物もその創造者である神との類似を有しており、その本性に即して神から神

[10]ST., I, q.63, a.2.

への類似を受け取ろうとすることは自然なことであり、そこには罪は生じない。しかし、神の力のことを忘れて、自らの固有の力によって神に類似したものであろうとすることが当然の正しいこと（justitia）であるかのようにふるまうとき、そこに罪が生じる。そのとき彼は自らの自然本性を超えた仕方で神に似たものとなろうとする。それは例えば、天と地を創造することができるようなものとなろうとすることである。そして、天使は神の恩恵によってのみ与えられることが可能な超自然的至福から離れて、自らの力だけで到達できるものを彼の至福の究極目的として欲したのである。[11]

ところで、天使はその自然本性に基づいて悪をなしたわけではなく、何らかの意志によって悪をなしたのである。存在する限りにおいて存在し（est inquantum est）、何らかの自然本性（natura）を有する者はまさしく自然本性的に何らかの善へと向かうのである。なぜなら、それらは皆善なる始原（principium）から発出したものであり、結果（effectus）は始原へと立ち返ろうとするからである。しかしながら、何らかの個別的善（bonum particulare）には何らかの悪が結びついていることがある。それ自体として善きものである火には燃やし尽くすという悪が結びついている。しかし、普遍的善（bonum universale）にはいかなる悪も結びついてはいない。それ故、自然本性的に個別的善へと向かうものには、付帯的な仕方においてではあるがそれと結びついた悪をなしてしまう可能性がある。人間もまた個別的善をなそうとする限りにおいて個別的悪なしてしまう可能性を有する。しかし天使は自然本性的に普遍的善へと向かうものであり、その自然本性に基づいて何らかの悪をなしてしまうなどということはあり得ないのである。そもそも、天使とはその知性的本性によって、それが認識するところの普遍的善へと秩序づけられており、それを本来の意志の対象としている。ただ意志の自由においてそのような本来の普遍的善という対象から逸脱しうるのである。それ故、悪魔もまた知性的実体である限りにおいて、悪への自然本性的傾向性（inclinatio naturalis）は有しておらず、また、その自然本性において悪ではありえないのである。[12]　また彼ら悪魔も創造の最初の瞬間から彼らに固有の意志の罪によって悪しきものとなったわけではない。[13]

また、罪を犯した天使たちのうちでもっとも上位の天使は、すべての天使たちのうちでももっとも上位の者であったと思われる。ここでは罪への傾向性（pronitas）と動機（motivum）を考えなければならない。傾向性に即して考えれば、上位の天使は悪への傾向性が最も少ないと言え

[11]ST., I, q.63, a.3.
[12]ST., I, q.63, a.4.
[13]ST., I, q.63, a.5.

る。それ故、ダマスケヌス[14]やアウグスティヌス[15]はプラトン主義的な考え方に従って、堕落したのは下位の天使であるとした。しかしながら、罪への動機に即して考えれば、そのような動機はもっとも上位の天使において最も強くなると考えられえる。悪魔の罪とは結局のところおごりの罪であり、その動機とは罪を犯すものに固有の卓越性にある。この卓越性とはもっとも上位の天使において最も大きなものであり、グレゴリウス[16]もまた、罪を犯した最初の天使はもっとも上位の天使であるとしている。それ故、最も優れた天使にこそ、その意志の自由決定力によって最も強い罪への動機があったと考えるのが最もふさわしいと思われる。しかし、このことに関しては他にも多くの異なった意見があり、それらは一方的に排除されるべきではない。[17]

また、最初に罪を犯した天使の名はセラフィム（Seraphim）ではなくケルビム（Cherubim）であったと思われる。ケルビムとは一般的な解釈によれば、知識の充満（plenitudo scientiae）を意味し、セラフィムとは「燃えるもの」「火をつけるもの」を、即ち「愛の火」を意味する。そして知識の方は死に至る罪とともに存在する可能性があるが、「愛の火」は死に至る罪とは適合しないものである。それ故、最初に罪を犯した天使はセラフィムではなくケルビムと呼ばれていたのであろう。[18]

また、最初に罪を犯した天使は他の天使たちにも罪を犯させることになったが、それは強制することによって（cogens）ではなく、奨励しながら導いていった（exhortatione inducens）と思われる。そのしるしはといえば、「行け、呪われたる者どもよ、永遠の火の中へ。それは悪魔とその使いたち（angeli）のために備えられたるなり。」という主の言葉[19]である。ここでは、何者かの提案に同意し罪を犯した者は、その罰においても彼の力のもとにあるという神の正義が示されている。これは次のペトロの言葉[20]によっても明らかである。すなわち、「彼を打ち負かしたる者に、彼は奴隷として引き渡されたるなり。」

では、堕罪において悪魔たちの知性は闇に閉ざされてしまったのであろうか。ところで、真理の認識には二通りの仕方がある。一つは恩恵（gratia）によるもの、もう一つは自然本性（natura）

---

[14] De fide orthodoxa II, 4

[15] De civitate Dei VIII,13

[16] In Evang. II, hom. 24

[17] ST., I, q.63, a.7.

[18] ST., I, q.63, a.7, ad1.

[19] Mt, 25,41

Ite, maledicti, in ignem aeternum, qui paratus est diabolo et angelis eius.

[20] II Peter 2,19

A quo quis superatus est, huic servus addictus est.

によるものである。そして、恩恵による認識に関しては、それによって神の秘密が知られるような観想的なもの（speculativa）と、それによって神への愛が生み出される情緒的なもの（affectiva）とがあり、どちらも知恵のたまもの（donum sapientiae）といわれるものである。これら三つの認識のうち自然本性に基づくものだけは悪魔たちからも取り去られることなく、また減じることもなく彼らのうちに残っている。それは知性（intellectus）あるいは精神（mens）といわれる、悪魔のうちにも残っている天使的本性である。その実体（substantia）としての単純さゆえに、天使的本性からはその罰においても何も取り去られることはない。これは人間がその罰において手や足やその他の身体の一部を切断されてしまうのとは好対照である。

一方、恩恵によって与えられる観想的認識に関しては、減じられていても完全に取り去られてはいない。聖なる天使たちが神の言葉において啓示された真理を明晰に認識するようにではない不完全な仕方ではあるが、神の秘密は必要に応じて、善き天使の仲介によってであれ、神の力による時間的なはたらきかけによってであれ、悪魔たちにも啓示される（revelare）のである。例えば、キリストの到来における受肉の神秘（mysterium Incarnationis）についても、悪魔たちには不完全な仕方でのみ啓示されており、それ故、その意味を完全に知ることのできた善き天使たちはそれを大いに喜んだのに対し、悪魔たちはただ恐れおののくのみであった。[21] 確かに悪魔たちが彼を神の子と認識し、彼の受難の果実が如何なるものであるかを知っていたなら、栄光の主を十字架にかけるなどということは決してしなかったであろう。[22] また、情緒的認識に関しては、それは愛（caritas）と同様悪魔たちからは完全に取り去られている。[23]

いったん、神に逆らうことを選択した悪魔たちの意志は頑ななものとなり、決してそこから離れようとはしない。これは感覚的認識に基づく人間の意志の在り方、即ち神から離れたり、また神に向き直ったりする、人間の在り方とは異なるものである。[24]

また、悪魔たちはその罰において如何なる苦しみを味わうのであろうか。恐れや悲しみや苦痛、また歓びといったものは、それらを感覚的欲求に由来する情念（passio）と考えるなら、それらは悪魔たちにおいてはあり得ないものである。しかし、それらを単純な意志のはたらき（simplices actus voluntatis）として考えるなら、それらは悪魔たちのうちにも見出されるものである。では単純な意志のはたらきにおける苦しみとはどのようなものであろうか。それは、存在するもの、あるいは存在しないものに向かおうとする意志が、抵抗（renisus）によって妨げられることである。このような苦しみは人間の肉体的な苦しみよりもはるかに大きなものであろう。実際、悪魔たちは実在する多くのものが実在しないことを望み、実在しない多くのものが実在することを望

[21] Augustinus, De civitate Dei IX,21

[22] ST., I, q.64, a.1, ad4.

[23] ST., I, q.64, a.1.

[24] ST., I, q.64, a.2.

んでいる。しかし、悪魔たちの倒錯した意志はあらゆる事柄において妨げ続けられる。こうして、悪魔たちは極めてねたみ深くなり、救済された者たちが断罪されること望み続けるのである。悪魔たちは彼らが自然本性的に意志する至福（beatitudo）をも奪われており、彼らは何かを意志し、それを望むたびに大きな苦しみを味わい続けるのである。[25]

そして、悪魔たちが罰を受ける場所としては、一つは彼らの犯した罪のゆえに地獄（infernus）が、もう一つは人間たちを試みにあわせるための闇の大気中（caliginosus aer）が考えられる。最後の審判の時まで、善き天使たちには人間たちを救うための任務（ministerium）があり、悪魔たちはその間、人間たちを地獄に導こうと試みにあわせ続けるが、天使たちは我々人間のそばに、そして悪魔たちは闇の大気中にいるのである。また、ある天使たちは聖なる者たちの魂とともに天におり、ある悪魔たちは地獄において彼らが悪へと導いた者たちを拷問にかけているのである。しかし、最後の審判ののちには、すべての悪しき人間たちと悪魔は永遠の地獄の中に、善き者たちは天にいることとなる。[26]

中世を代表する神学者、哲学者であるトマス・アクィナスの悪魔論を概観してみたが、現代の人々はもはやこのような悪魔の存在を現実のものとしては受け入れず、科学的理性を欠いた人間たちが古代から受け入れてきた、単なる迷信、幻想のようなものと考えるであろう。しかし、我々の精神世界に悪魔的なものは今でも存在し続けているように思われる。われわれ人間の心が、何か悪魔的なものとしか言いようのない不可思議な力によって、悪と破壊へと導かれることはよくあるのではないか。確かにそれが社会的悪へと結びつくことも多いかもしれない。しかし、悪魔なものによってわれわれが導かれる世界とは、美とエロティシズムの充溢する世界ではないか。もし、悪魔が存在しなければ、西洋における多くの文学作品や芸術作品も生まれることはなかったであろう。神による禁止の領域、そこに踏み込むことによってこそわれわれは悪と美とエロティシズムがひとつになった世界を体験し、神という超自我的存在を破壊し、そして、生そのものの充溢とその意味を体験することができるのではないか。キリスト教徒にとってそれは地獄、ユイスマンによればそれはサディズムの世界であろう。キリスト教的世界観の中で悪と美とエロティシズムの三位一体が、サディズムや、それとの関係でよく語られるマゾヒズムとどのようにかかわってくるのか、このようなことを次に考察されるべき問題としておきたい。

---

[25] ST., I, q.64, a.3.

[26] ST., I, q.64, a.4.